

### 第3章 現代東南アジアの首都圏における宗教と政治 ——ジャカルタの事例から——

見市 建

要約：

東南アジアの首都圏では急速な社会変化に対応して、新興の宗教運動の台頭がみられる。こうした運動は、しばしば土着の大衆的な宗教伝統を取り入れつつ、現代の消費文化と適合している。都市は宗教の革新運動とともに、「道徳の荒廃」を憂う保守主義の中心地でもある。国家は宗教を統制するとともに、支配の正統化に利用する。ときに宗教道徳に基づいて少数派の抑圧に加担することもある。以上の諸点は、ジャカルタにおける宗教と政治の関係、とくに近年のジャカルタ州知事への抗議運動とその帰結を通じて確認することができる。

キーワード：

宗教、政治、国家、首都圏、イスラーム、ジャカルタ

#### はじめに

東南アジアにはイスラーム、キリスト教、仏教、ヒンドゥー教あるいは儒教といったいわゆる世界宗教が、それぞれ相当数の信者をかかえている。宗教はエスニシティやナショナリズムとも結びつき、人々のアイデンティティを形成してきた。また各地で急速な社会変化に対応して、宗教の変革や新たな宗教運動の台頭がみられる。新旧の宗教運動は、道徳的な権威として、また選挙を左右する有権者集団として、政治にも影響を与えている。本章では、現代東南アジアの首都圏における宗教動向とその政治における役割について、ジャカルタの事例から検討したい。まず第1節で東南アジア首都圏における宗教と政治の関係を俯瞰して、現状と論点を確認したい。第2節以降、近年のジャカルタにおける宗教と政治の関係を考察していきたい。

#### 第1節 東南アジア首都圏における宗教と政治

首都は政治や経済の中心であるだけでなく、多くの場合、宗教の中心でもある。政

治権力は大都市の宗教的な象徴や空間を利用し、あるいは意図的に宗教に代わる象徴や空間を創り出している (der Veer 2015, 7)。タイの現チャクリー王朝は 18 世紀末以降、森に囲まれた「野性的で危険な」地方を支配する、聖なる中心として首都バンコクを建設した。歴代の王朝において、中心と周辺が明確に区別されてきた僧侶の共同体 (サンガ) と相似形となっている。王は宗教の守護者である。王宮のまわりには、内務省、軍と警察といった国家権力の象徴とともに、最高位の僧侶たちの住居が置かれている (Tayler 2015)。インドネシアの初代大統領スカルノは、オランダ領東インドのバタビアをジャカルタ (旧名ジャヤ・カルタ [大勝利] の略)、植民地総督府を「独立宮殿」と呼び換えた。植民地期から立つカトリック大聖堂の道向かいにイスティクラール (アラビア語で独立)・モスクを建設、そしてそれらの中心に国民記念碑 (Monumen Nasional: モナス) を配置した。国民統合の記念碑はヒンドゥー教における男女の象徴を模した巨大なタワーである (Pratiwo and Nas 2005)。

国家は、宗教を統制し、また何が宗教であるのかを決定する。インドネシア、タイ、ベトナムには公認宗教制度がある。身分証明書に宗教の記載を義務付けてきたインドネシアでは、華人は公認宗教のどれかを選択する必要があった。タイでは中国廟は宗教行政の管轄外ということになる (片岡 2017)。連邦国家であるマレーシアでは州政府にイスラームの宗教的権威 (ムフティ) が置かれている。例えばシーア派を禁止する宗教的見解 (ファトワ) が州単位で出されている。

都市は「宗教的な革新の劇場である」 (der Veer 2015, 9)。近代化やグローバル化に伴う社会の急激な変化は大都市において最も先鋭的に現れる。多くの場合、都市知識人が社会の変革を志向するイデオロギーを生み出している。さまざまな外来思想を受容ないし拒絶する尖兵となるのも都市である。世俗思想にしる、宗教思想にしる、大学のキャンパスが思想の展開と活動の主戦場となる。首都はまた「道徳の荒廃」がもっとも危惧される場所であり、宗教的な保守主義を生み出しやすい環境でもある。

東南アジアの大都市は地方からの絶え間ない人口の流入とともに、郊外への拡大を続けている。首都の衛星都市や中小の地方都市も急速な変化を遂げている。他方で、大都市の内部に濃厚な人間関係や近所付き合いを維持した集落 (例えば、インドネシアのカンプン) を抱える。大都市とそれ以外の地域は、明確に隔てることができない。

都市の中間層や富裕層に新たな信仰の場や功德の機会を与えることで急速に拡大した組織は、宗教を問わず東南アジアの大都市に見られる。こうした組織は、既存の組織とは一線を画したエンターテイメントともいえるような新しい経験を提供している。インターネットやソーシャルネットワークサービス (SNS) などを活用し、消費文化とも適合的である。バンコク北部に巨大な寺院を抱えるタンマガーイ (Dhammakaya, 1916 年設立) では、数万人単位の集団瞑想が整然と行われることで知られている。寄付金によって功德を積むことができるだけでなく、物質的な利益につながることを謳っている (Tayler 2008)。マニラには旧来のカトリック教会に加え、国際的な福音主義 (エバンジ

ェリカル) のメガチャーチが台頭している (Cornelio 2015)。メガチャーチ現象はシンガポールでも顕著である。ジャカルタではテレビにも出演する新興の「セレブ」イスラーム説教師が、現世での経済的成功の秘訣を説く (見市 2014)。

首都圏はより大衆的な信仰の中心でもある。救済を与える唯一の正統な教会を自称するイグレシア・ニ・クリスト (Iglesia Ni Cristo, INC, 1914 年設立)、カリスマ的なカトリック運動エル・シャダイ (El Shaddai, 1981 年設立) はいずれもマニラを拠点としている (Wiegele 2005; Harper 2001)。ジャカルタでは、近年神の名を連呼するなどの行 (ズィクル) を中心とする数百の宗教運動が毎晩どこかで祈祷集会を行っている。一部のズィクル指導者はクアラルンプールでも人気を得ている。

新旧の宗教運動は首都の政治にもしばしば重大な影響を与える。宗教道徳に関わるような政策や事柄、あるいは組織の利益に応じて、政府へのロビー活動や路上におけるデモを行う。まとまった票を持つ組織として、選挙を左右する。フィリピンのカトリック教会や INC は、マルコスの権威主義政権に対する 1986 年のエドゥサ革命、エストラダ大統領に対する 2001 年のエドゥサ II においても動員に貢献した。タイのタンマガーイは現在の軍事政権によって、その元僧侶にマナーロンダリングなどの容疑をかけられ、政府との対立を深めている。同組織が軍事クーデターのきっかけとなったタクシン元首相に近い関係にあることが背景とされる<sup>1</sup>。後述するジャカルタの事例でも、複数の新興イスラーム運動が主催するキリスト教徒の州知事への抗議運動が、選挙や刑事裁判の行方を左右した。

保守的な宗教道徳の適用は、異端とみなされた宗派や宗教的少数派、性的な少数派 (LGBT) の人々への抑圧、表現の自由への取り締まりにつながる恐れもある。フィリピンではキリスト教組織、インドネシアではイスラーム組織によって、アメリカの人気歌手レディーガガのコンサートを不道徳だとして反対する運動が起こった。国家は宗教を管理し、あるいは宗教運動からの要求に応じるだけでなく、これらに配慮し、むしろ先回りして「道徳的」な権威の役割を担うこともある<sup>2</sup>。国家はときに多数派の宗教勢力からの歓心を得るために、あるいは政治家や官僚の宗教観に基づいて、積極的にそうした抑圧や取り締まりに加担するのである。

整理すると、政治や経済と並んで、宗教活動の中心でもある東南アジアの首都圏では、急速な社会変化に適合する新興の宗教運動が台頭している。こうした運動は、しばしば土着の大衆的な宗教伝統を取り入れつつ、現代の消費文化と適合している。都市は宗教の革新運動とともに、「道徳の荒廃」を憂う保守主義の中心地でもある。国家は宗教を統制するとともに、支配の正統化に利用する。ときに宗教道徳に基づいて少数派の抑圧に

<sup>1</sup> “A Temple Under Siege: Wat Phra Dhammakaya,” *The Diplomat*, March 23, 2017. (<https://thediplomat.com/2017/03/a-temple-under-siege-wat-phra-dhammakaya/>)

<sup>2</sup> フィリピンとシンガポールにおけるそうした例として Cornelio (2015)、Mathews (2009) を参照。

加担することもある。

次節以降では、ジャカルタを事例に以上の要素を順に検討していく。ジャカルタ首都圏の宗教伝統や社会変化を踏まえ、とくに 1998 年の民主化前後から台頭したイスラーム運動の展開とその政治との関係を、2007 年以降の 3 度の州知事選から検討したい。

## 第 2 節 ジャカルタの大衆的宗教伝統とやくざ組織の台頭

ジャカルタ首都圏における宗教の構造は、社会階層やエスニシティの分布と切り離すことができない。ムスリムの割合は 85.4% (2010 年センサス) と全国平均 (87.2%) より若干少ない。代わりに仏教徒が 3.3% (全国 0.7%) を占め、これは華人の割合が 5.5% (全国 1.2%) と比較的多いためである<sup>3</sup>。エスニシティではジャワ人が最大で 35.2% (全国 40.2%)、ブタウィ人が 27.6% (同 2.9%)、スンダ人 15.3% (同 15.5%)、華人と続く。ブタウィはジャカルタの植民地期の名称バタヴィアを語源としており、華人やアラブ人などを含む混合的な文化である<sup>4</sup>。異なるエスニシティ間の婚姻は珍しくなく、こうしたカテゴリーはあくまで自称である。

多様な背景を持つブタウィ文化であるが、現代ではその文化的アイデンティティはイスラームと結びつけて語られることが多い。ブタウィの宗教実践は、宗教指導者 (ウラマー) への尊敬、死者への祈祷 (タフリラン)、墓参 (ズィアラ)、ズィクルなどを重視する伝統主義が大半である<sup>5</sup>。ズィクルなどの行によって神との合一を志向する神秘主義 (スーフィズム) の影響も強い。伝統主義はインドネシア最大のイスラーム組織ナフダトゥル・ウラマー (Nahdlatul Ulama、以下 NU) に代表される。こうした宗教的な所属は政治とも結びつき、与党ゴルカルが圧倒したスハルト体制期の総選挙でも、ジャカルタは例外的にイスラーム系野党の開発統一党 (PPP) が勢力を維持した。1977 年選挙では、PPP の得票がゴルカルを上回り、その後のより厳しい野党統制の一因となった。ただし NU のなかでもジャカルタの自立性は顕著であり、NU 発祥地の東ジャワ出身のウラマーを中心とした中央執行部とは一線を画してきた。アブドゥルラフマン・ワヒド (元大統領)、サイド・アキル・シラジ (Said Aqil Siradj) 現 NU 会長など他宗教などに対して寛容な立場をとる中央執行部に対して、ジャカルタ支部はよりしばしば保守的な立場を表明してきた。

アラブ系住民のなかでも預言者ムハンマドの子孫とされるサイドが特別な地位を占めるのもジャカルタの特徴である。彼らは敬愛を込めてハビブ (単数) /ハバイブ (複数) と呼ばれる。彼らはしばしば魔術的とも取りうる「カリスマ」を持つと考えられ、

<sup>3</sup> ジャカルタのエスニシティ割合は 2000 年センサス、それ以外はすべて 2010 年センサスに基づく (BPS 2004; 2011)。

<sup>4</sup> 華人とブタウィ・アイデンティティについては Knörr (2009) を参照。

<sup>5</sup> 伝統主義については、Bruinessen (1996) を参照。

信仰の対象にもなってきた。預言者に代替して、敬愛を注ぐ存在がサイドである。断食明けの大祭、預言者ムハンマドの聖誕祭マウリドのような年中行事や冠婚葬祭、さまざまなイベントにおいて、サイドは祈祷やズィクルなどの宗教儀礼をリードする。

こうしたジャカルタの大衆的な宗教文化は、民主化以降に台頭した宗教社会組織あるいは「やくざ（プレマン）組織」にも反映されている<sup>6</sup>。宗教的道德の荒廃を憂うイスラーム防衛戦線（Front Pembela Islam: FPI）はサイドに率いられ、ブタウィ同胞フォーラム（Forum Betawi Rempug: FBR）はブタウィのエスニックアイデンティティを強調する。ともに前述のタフリラン、ズィアラ、ズィクルなどの宗教伝統を重視する。

スハルト権威主義体制末期の1997年に結成されたFPIは、98年5月の政変後、学生の民主化運動に対抗させる目的で治安当局が動員した自警団の一部として初めて政治の表舞台に出た。特徴的なのは、「イスラーム法の適用」と称して酒類を提供するバーやディスコ、売春宿の襲撃を行うことである。あるいは、彼らがイスラームの敵や脅威とみなす、一部キリスト教会やイスラームのなかでも異端とされるアフマディヤ、性的少数派（LGBT）への攻撃である。FPIを率いるのはハビブ・リゼクの呼称で広く知られているサイドのムハンマド・リゼク・ビン・フセイン・シハブ（Muhammad Rizieq bin Hussein Shihab, 1965～）である。FPIには麻薬の売人や傷害事件などで服役していたものも少なくなく、バーなどの襲撃ではみかじめ料を徴収していたことも知られている（Wilson 2008; Wilson 2015）。2001年に結成されたブタウィ同胞フォーラム（Forum Betawi Rempug: FBR）は、ブタウィ人の利益を掲げて、首都圏に急速に拡大した。本部はイスラーム学校であり、敷地内にある創設者の墓はズィアラの対象になっている。

首都圏の社会構造もこうした組織の台頭に寄与している。両組織ともに、一部貧困層の受け皿になり、「雇用」の機会を提供している。とくにFPIはアホック知事による都市開発で立ち退きを迫られた地域に入り込んで、政府への抗議運動を組織している。

### 第3節 急速な都市化と新たな宗教運動

以上のような大衆的な伝統に加えて、1980年代以降のジャカルタ首都圏では大学キャンパスや都市化に伴う新たな宗教運動が台頭した。第一にそれは国際的なイスラーム主義の動向である。イスラーム主義は、イスラーム的な政治秩序を形成しようとする政治イデオロギーである。こうした運動はジャカルタ首都圏のボゴール、ブカシあるいはバンドゥンの大学キャンパスを中心に発展した。

個人から家族、社会、国家へと漸進的なイスラーム化を目指すエジプトのムスリム同胞団をモデルとした学生運動のタルビヤは、1998年の民主化運動の過程で表舞台に登場

---

<sup>6</sup> インドネシアにおけるやくざ（プレマン）については、岡本（2015）に詳しい。フィリピンなどとの比較の視点を提供するものとして Wilson（2012）も参照されたい。

し、その後正義党（現在の福祉正義党 Partai Keadilan Sejahtera: PKS）を結成した。2004年総選挙では、清廉潔白なイメージ形成に成功し、ジャカルタで23%を獲得して第1党になった（全国では7.3%）。解放党はより急進的な思想を持つ。イスラームを世界的に唯一代表する政治主体であるカリフ制国家の樹立を掲げ、やはり大学キャンパスを中心に拡大した。この他、初期イスラーム（サラフ）への回帰し、より厳格なイスラーム法適用を目指すサラフィー主義はジャカルタ郊外のいくつかのモスクを拠点とした。サウジアラビアなどからの資金が、大学の宗教運動やサラフィー主義運動に流入し、その浸透を後押しした。サウジアラビア政府は、留学生の受け入れの他、1983年にジャカルタに設立した大学であるイスラームとアラブ研究機関（LIPIA）を通じたサラフィー主義指導者の育成も行っている。

イスラーム主義運動が、旧来の宗教伝統に否定的な立場をとるのに対して<sup>7</sup>、前述の伝統主義はこれを擁護する。首都圏では、瞑想やズィクルを通じた精神的な充足感を人々に与えることで台頭してきたグループもある。これが第二の流れである。1980年代末以降、首都圏では個人の家などモスク以外の場所に集まり、ズィクルを頻繁に行う講話会（Majelis Taklim）がさかんになった。2000年代に入ると、ジャカルタ郊外の高級住宅地に拠点を構え比較的上層向けのズィクルで有名になったアリフィン・イルハム（Arifin Ilham、1969～）の、続いてサイドが率いる中間層からより下層に人気があるグループが大規模な集会を開催するようになった。新興のズィクル組織は、従来のスーフィー教団のように特別な入会儀礼があるわけではなく、「都市型のスーフィズム」と呼ばれることもある。

ムンズィール・ビン・フアド・アル＝ムサワ（Munzir bin Fuad Al-Musawa、1973～2013）が設立したマジェリス・ラスルッラー（Majelis Rasulullah）とマジェリス・ヌルル・ムストファ（Majelis Nurul Mustofa）が最大規模である。マジャリス・ラスルッラーは神の名を連禱するズィクルとともに、ムンズィールが預言者ムハンマドの生涯から導き出した倫理的規範を、ストーリーとして語るスタイルである。涙を流す参加者も少なくない。マジェリス・ヌルル・ムストファの場合は、預言者を賛美する詩歌（ショラワット shalawat）が主体である。ショラワットは節をつけて歌われ、先導者に合わせて参加者も体を動かし、あるいは合唱する。旗が振るものもあり、花火が打ち上げられることもある。

イスラーム主義／サラフィー主義と伝統主義／神秘主義という異なる二つの潮流は、緊張感がありながらも、つねに対立的なものではない。ズィクル指導者のアリフィン・イルハムは、しばしばイスラーム主義者のなかでももっとも急進的な武装闘争派の集会にも現れる。拠点となるモスクには反シーア派の横断幕を掲げていた。FPIによる宗教道徳の「防衛」はより広い社会の保守的な意見を集約し、ときに政策への影響を与えて

---

<sup>7</sup> サラフィー主義では、さらにこうした宗教伝統をイスラームからの逸脱（ビドア）とみなして糾弾する。

いる (Wilson 2015, 152)。2008 年には異端とされるアフマディヤの布教が 3 閣僚決定で禁止され、2012 年にはレディーガガのコンサートが中止された。FPI や PKS がデモを行い、前者のケースではインドネシア・ウラマー評議会 (Majelis Ulama Indonesia: MUI) を通して大統領周辺への直接のロビーが行われた (ICG 2008)。次項では、近年の事例から宗教と政治の関係をより具体的に検討したい。

#### 第 4 節 ジャカルタ首都圏における宗教と政治

2005 年に地方首長の直接選挙が導入されて以降、ジャカルタ州知事選はつねに宗教が争点として浮上してきた。その傾向は回を追うごとに強まっている。過去 2 度の選挙では、上記のジャカルタの宗教伝統や新興の宗教運動が大きな役割を持つ状況となった。

初めての直接選挙となった 2007 年は、当時州議会で第 1 党であった PKS が立てた候補者 (アダン・ダラジャトゥンとダニ・アンワル) が他のすべての政党が相乗りした候補 (ファウズィ・ボウオとプリヤント) と対立するという構図であった。このため PKS のイスラーム主義が危険であるとのキャンペーンが行われた。両陣営にブタウィ人があり (ダニ・アンワルとファウズィ・ボウオ)、エスニシティは大きな争点にはならなかった。この選挙で勝利した元州官僚のファウズィ・ボウオのキャッチコピーの一つは「エスニシティと宗教が何であれ、ボウオとプリヤントが選択肢」であった (Miichi 2014, 72)。

2012 年選挙では、再選を目指したファウズィ・ボウオが副知事候補にブタウィ人のナフロウィ・ラムリと組み、ブタウィ票を固める戦略にでた。ナフロウィ・ラムリは元軍人で、FBR と並ぶブタウィ人やくざ組織ブタウィ子弟コミュニケーション・フォーラム (Forkabi) の役職者でもあった。いずれも他地域で地方首長をしていたジョコ・ウィドド (通称ジョコウィ、現大統領) とバスキ・プルナマ (通称アホック) との事実上の一騎打ちとなった。ジョコウィはジャワ人、アホックは華人でキリスト教徒であったため、エスニシティと宗教が共に争点となった。とくにアホックの宗教が問題となった。多くのブタウィ人ウラマー、FBR や FPI、さらに決選投票でファウズィ側についた PKS は、「ムスリムの候補」への投票を呼びかけた。他方、病床のマジェリス・ラスルッラー指導者ハビブ・ムンズィールは、ファウズィ、ジョコウィを共に受け入れ、中立を保った。ジョコウィとアホックは政治の変革を訴える一方、多数派のムスリムへのアピールを続けた。ジョコウィ組はムスリム票もある程度得て、僅差で勝利した (Miichi 2014)。

2017 年選挙における宗教キャンペーンはさらに激しいものになった。2014 年にジョコウィが大統領となり、知事に昇格したアホックが再選を目指した。対立候補のブタウィ色、イスラーム色は元々強くはなかった。しかしアホックは自らの失言によって、選挙の数ヶ月前から宗教を主要な争点にしてしまった。発端は 2016 年 9 月末、アホックが遊説先で、コーランの一節 (食卓章 51 節) を根拠に異教徒の指導者を認めない勢力を茶化した発言だった。この発言のビデオが、一部編集された上、フェイスブックおよびユー

チューブに掲載され、一気に拡散した。アホックは宗教を冒涇したとみなされ、FPI や一部のイスラーム主義およびサラフィー主義運動の指導者が抗議運動を組織した。11月4日には10万人、12月2日には70万人ともいわれる参加者を動員、1998年以降最大規模のデモとなった。対立候補を推していた政治エリートからの資金提供が噂され、政党ではPKSが動員に貢献した。

しかしここまでの規模になった最大の理由は、一般のムスリムを参加せしめたからであった。保守的なブタウィ人のウラマーやサイドはデモ参加にお墨付きを与え、モスクや講話会の単位で大勢が参加した。アリフィン・イルハムなどのズィクル指導者も壇上にあがった。NU中央執行部はデモへの参加をしないよう呼びかけたが、ジャカルタ支部はこれに従わなかった。マジェリス・ラスルッラーはデモへの参加を容認した。アホックが知事になってから、モナス（国民記念碑）広場を使つての大集会が禁じられており、知事をよく思わないメンバーも多かった。

抗議運動の指導者らは、アホックの刑事裁判を求めた。デモに前後してアホックは宗教冒涇罪で起訴され、裁判が開始された。2017年2月に行われた州知事選第一回投票でアホックは僅差でトップに立ったものの、ムスリム票離れは明らかで、4月の決選投票ではアラブ系のアニス・バスウェダン前高等教育相に大差で敗れた。アニス・バスウェダンはそれまで比較的反動的な知識人とみられてきたが、FPIのリゼク・シハブと同席するなどデモ主催者に接近した。5月にはアホックに禁固2年の判決が下され、収監された。

## おわりに

ジャカルタ首都圏の宗教運動およびその政治の関係を概観すると、他の東南アジア諸国との多くの共通点を見出すことができる。大都市の経済格差、「道徳の荒廃」あるいは消費文化を反映した諸運動が、宗教を問わず台頭している。「道徳の荒廃」を憂う保守的な宗教運動は、自らその「取り締まり」を行い、あるいは国家にその規制や禁止を要求する。近年のジャカルタ州知事への抗議運動についても、以上のような大都市における宗教と政治の基本的な構造から、説明をすることができるだろう。

ただし、ジャカルタ固有の宗教伝統が宗教運動の組織化に貢献している点、そうした宗教運動台頭の背景にある固有の社会的政治的な変化にも注目すべきだろう。前者については、本論でも指摘したとおりである。ジャカルタの過去3回の州知事選を比較すると、2007年と2012年は宗教的寛容性を訴えた候補が勝利している。2017年選挙では逆の結果になった。この理由を、社会や宗教運動の全般的な保守化に求めるのか、あるいは知事の失言と選挙前のエリート間の政治的競争の高まりという一過性の出来事とみる

かは、さらなる検討が必要である<sup>8</sup>。この問題については、別稿で改めて検討したい。

## 参考文献

### <日本語文献>

岡本正明 2015『暴力と適応の政治学——インドネシア民主化と地方政治の安定——』京都大学出版会。

片岡樹 2017「信仰の軸線 東南アジアにおいて『宗教を信じる』とは何を意味するか」山本信人監修、宮原暁編著『東南アジア地域研究入門 2 社会』慶應義塾大学出版会、269～288 ページ。

見市建『新興大国インドネシアの宗教市場と政治』NTT 出版、2014 年。

### <外国語文献>

Arifianto, Alexander R, 2017, “The Missing Middle,” *New Mandala*, 15 Feb. (<http://www.newmandala.org/the-missing-middle/>)

Badan Pusat Statistik (BPS) 2004. *Statistics Indonesia*.

-----, 2011. *Hasil Sensus Penduduk 2010*. (<http://www.sp2010.bps.go.id>)

Bruinessen, Martin van, 1996, “Traditions for the Future: the Reconstruction of Traditionalist Discourse within NU,” in Greg Barton and Greg Fealy, *Nahdlatul Ulama, Traditional Islam and Modernity in Indonesia*, Clayton: Monash University, pp. 163-189.

Cornelio, Jayeel Serrano, 2015, “Global and Religious: Urban Aspirations and the Governance of Religions in Metro Manila,” in Peter van der Veer ed., *Handbook of Religion and the Asian City: Aspiration and Urbanization in the Twenty-First Century*, University of California Press, pp. 69-88.

der Veer, Peter van, 2015, “Introduction: Urban Theory, Asia, and Religion,” in Peter van der Veer ed., *Handbook of Religion and the Asian City: Aspiration and Urbanization in the Twenty-First Century*, University of California Press, pp. 1-17.

Fealy, Greg, 2016, “Bigger than Ahok: explaining the 2 December mass rally,” *Indonesia at Melbourne*, 7 December.

(<http://indonesiaatmelbourne.unimelb.edu.au/bigger-than-ahok-explaining-jakartas-2-december-mass-rally/>)

Harper, Ann C., 2001, “The Iglesia Ni Cristo and Evangelical Christianity,” *Journal of Asian Mission*, 3(1), pp. 101-109.

---

<sup>8</sup> ひとまず前者の立場として、よりナショナルな政治に引きつけた分析として Fealy (2016) を参照。

- Hefner, Robert W. 2010. "Religious Resurgence in Contemporary Asia: Southeast Asian Perspectives on Capitalism, the State, and the New Piety." *Journal of Asian Studies* 69(4):1031-47.
- International Crisis Group (ICG), 2008, "Indonesia: Implications of the Ahmadiyah Degree," *Asia Briefing* No. 78, Jakarta and Brussels: ICG, 7 July.
- Knörr, Jacqueline, 2009, "'Free the dragon' versus 'Becoming Betawi': Chinese identity in contemporary Jakarta", *Asian Ethnicity*, 10(1), pp. 71-90.
- Mathews, Mathew, 2009, "Accommodating Relationship: The Church and State in Singapore," in Julius Bautista and Francis Khok Gee Lim eds., *Christianity and the State in Asia: Complicity and Conflict*, Abingdon and New York: Routledge, pp. 184-200.
- Miichi, Ken, 2014, "The Role of Religion and Ethnicity in Jakarta's 2012 Gubernatorial Election," *Journal of Current Southeast Asian Affairs*, 33(1), 2014, pp.55-83.
- Pratiwo and Nas, P.J.M. 2005, "Jakarta: conflicting directions," in P.J.M. Nas ed., *Directors of Urban Change in Asia*, pp. 78-95. London and New York: Routledge.
- Taylor, James, 2008, *Buddhism and Postmodern Imaginings in Thailand: The Religiosity of Urban Space*, Farnham, Surrey and Burlington, Vermont: Ashgate.
- , 2015, "Urban Buddhism in the Thai Postmetropolis," in Peter van der Veer ed., *Handbook of Religion and the Asian City: Aspiration and Urbanization in the Twenty-First Century*, University of California Press, pp. 219-233.
- The Diplomat, 2017, "A Temple Under Siege: Wat Phra Dhammakaya," March 23. (<https://thediplomat.com/2017/03/a-temple-under-siege-wat-phra-dhammakaya/>)
- Wiegele, Katharine L., 2005, Reframing suffering and success through the El Shaddai movement of the Philippines. *Asia Pacific Social Science Review* 5, pp. 68-88.
- Wilson, Ian Douglas, 2008, "As Long as It's Halal": Islamic Preman in Jakarta. In Greg Fealy and Sally White eds., *Expressing Islam: Religious Life and Politics in Indonesia*, Singapore: ISEAS.
- , 2012, "Testing the Boundaries of the State: Gangs, militias, vigilantes and violent entrepreneurs in Southeast Asia," in Richard Robison ed. *Routledge Handbook of Southeast Asian Politics*, Oxon and New York: Routledge, pp. 288-301.
- , 2015 *The Politics of Protection Rackets in Post-New Order Indonesia: Coercive capital, authority and street politics*. Oxon: Routledge.